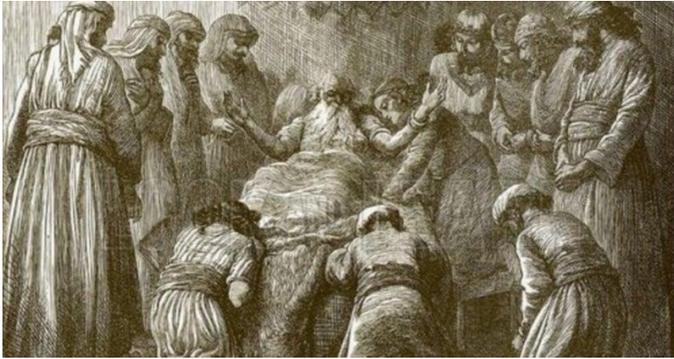


2021年4月18日 説教「ヤコブの葬送」

創世記 50 章 1～14 節

子ども達への遺言を述べた後、ヤコブは地上の命を終えていきました。



1. 喪の期間から (1～5 節)

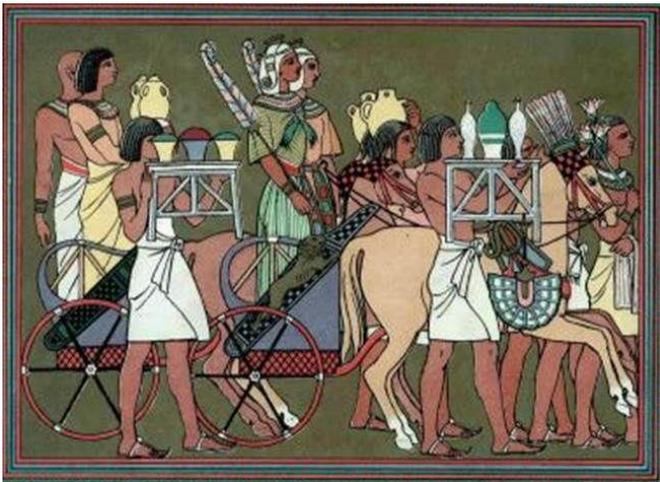
①別れ (1) 「ヨセフは父の顔に取りすがって泣き、父に口づけした。」ヤコブの生涯は 147 年。エジプトに来てから 17 年。かつて、兄エサウから逃れて、北のパダン・アラムでの 20 年余りがありましたが、その他はカナンに生きたヤコブの晩年は、ヨセフの庇護の下に過ごすことになりました。それゆえに、飢饉の間も命が守られ、最期は後顧に憂いなく、息子たちにその使命を委ねました。一方、ヨセフは長く離れていた時期はありましたが、最後は、身近に父ヤコブと過ごし、天に送ることができました。彼は主に感謝をし、召された父の顔にとりすがって泣き、別れの口づけをしたのでした。

②喪に服す (2～3) 「ヨセフは彼のしもべである医者たちに、父をミイラにするように命じたので、医者たちはイスラエルをミイラにした。そのために四十日を要した。ミイラにするためにはこれだけの日数が必要だった。エジプトは彼のために七十日間、泣き悲しんだ。」いろいろと考えた末のことでしょう。ヨセフはヤコブの遺骸をミイラにすることにしました。彼に仕える医者達に、それを命じました。ミイラにするのに 40 日を要したことを説明書きのようにしているのは、創世記がエジプトの民以外を読者と想定していることがわかります。エジプトにあつての葬送とあつて、宰相の父の死についても 70 日間にわたる、喪の期間があり、家族ばかりでなく、人々もその死を覚えて悲しんだのでした。

③喪が明けて (4～5) 「その喪の期間が明けたとき、ヨセフはパロの家に告げて言った。『もし私の願いを聞いてくれるのなら、どうかパロの耳に、こう言って伝えてほしい。』私の父は私に誓わせて、『私は死のうとしている。私がカナンに掘っておいた私の墓の中に、そこに、必ず私を葬らなければならない』と申しました。どうか今、私に父を葬りに上って行かせてください。私はまた帰ってきます、と。』」ヨセフは宰相とはいえ、外国出身であることをわきまえていました。そして、父ヤコブの意向を伝えるにあたっては、丁重にしもべを通して、父ヤコブがカナンの所定地への葬りを切望していたことを伝えたのです。また、それにあたっては、カナンに渡ったとしても、必ずエジプトにもどって来ることを申し添えたのでした。

2. ヤコブの葬儀 (6～11 節)

①パロの命令 (6) 「パロは言った。『あなたの父があなたに誓わせたように、上って行ってあなたの父を葬りなさい。』」パロもヨセフのこれまでの貢献を評価していたのででしょう。温情をもって、ヨセフの申し出を受け入れ、カナンの地に行つて葬りをするようにと命じたのでした。



ヤコブの葬儀 Wikipedia

後の世において、イスラエルの民がその時代のパロの支配下に、苦しんだことを思うと、考えられないほどの恵みに浴していたと言えるでしょう。

②葬りの一団 (7~9)「そこで、ヨセフは父を葬るために上って行った。彼とともにパロのすべての家臣たち、パロの家の長老たち、エジプトの国のすべての長老たち、ヨセフの全家族とその兄弟たちおよび父の家族たちも上って行った。ただ、彼らの子どもと羊と牛はゴシェンの地に残した。また戦車と騎兵も、彼とともに上っていったので、その一団は非常に大きなものであった。」カナンへの道を共にしたのは、ヨセフの全家族、ヨセフの兄弟達、父の一族ばかりではなく、エジプトのパロの家臣たちや長老たちも伴ったというのです。もっとも幼児や羊、牛などはゴシェンの地に残しました。ともかく、一大集団がカナンへの旅をしたのです。

③荘厳な葬式 (10~11)「彼らはヨルダンの向こうの地ゴレン・ハアダテに着いた。そこで彼らは非常に荘厳な、りっぱな哀悼の式を行い、ヨセフは父のため七日間、葬儀を行った。その地の住民のカナン人は、ゴレン・ハアダテのこの葬儀を見て、『これはエジプトの荘厳な葬儀だ。』と言った。それゆえ、その名はアベル・ミツライムと呼ばれた。これはヨルダンの向こうの地にある。」ヤコブの葬儀が行われたゴレン・ハアダテがどこなのかは不明です。ヨルダン川の西側ではありません。それは荘厳な哀悼式であったというのですから、厳粛で一家の長の葬儀にふさわしいものだったと思われまます。その地はこの葬儀にちなんで、アベル・ミツライム (エジプト人の牧場) と呼ばれるようになりました。

3. 墓への葬り (12~14 節)

①命じられた通りに (12)「こうしてヤコブの子らは、命じられたとおりに父のために行った。」ヨセフをはじめとした、ヤコブの子達にとって、ヤコブの葬儀をカナンの地で行うことは、使命のようなものでしたから、つながりなくなされて安心したことでありましよう。父の願いをかなえることができたのですから。エジプトに移ってから 17 年。その日々を思ったことでしょう。

②マクペラの墓に葬り (13)「その子らは彼をカナンの地に運び、マクペラの畑地のほら穴に彼を葬った。そこはアブラハムがヘテ人ヘフロンから私有の墓地とするために、畑地とともに買ったもので、マムレに面している。」すでにカナンの地に来ていましたが、カナンのマクペラにある墓地にヤコブの遺骸を運んだということです。アブラハムがかつて購入した地で、アブラハムはもちろん、サラもイサクも葬られている墓です。その地に葬られることこそが、ヤコブの願いであったのです。

③エジプトへの帰還 (14)「ヨセフは父を葬った後、その兄弟たちおよび、

父を葬るために彼といっしょに上って行ったすべての者とともに、エジプトに帰った。」そして、ヨセフは父からたつての願いとして受けた、マクペラの墓に父への忠実として、果たすことができました。それとともに、エジプトの地にもどることは、自分をここまで別の面で育ててくれたパロとの約束を忠実に果たすためにしなければならぬことでした。彼は、カナンの地に後ろ髪を引かれつつも、エジプトに帰ったのです。イスラエルの民が、この地に戻るのは数百年もたった後でありました。

《結論》

日本長老教会の東関東中会には、シオンチャペルというチャペル付きの納骨施設があります。この国の宣教においては、お墓という施設を教会としても、備えていく必要があるということからプロジェクトができ、10 年程前に備えられたのです。

アブラハム、イサクの家にはマクペラに墓があり、ヤコブは信仰を受け継ぐ者として、葬りをそこにしてもらいたいとヨセフに要請し、それが実現した次第が今朝の聖書箇所に記載されています。

もっとも、墓というのは私どもの信仰においては、最終点ではありません。「私たちの国籍は天にあります」(ピリピ 3:20) とあるように、墓は地上的な記念であって、行く着く先ではないのです。ですから、墓前においても、私たちは、墓に納められた人の地上生涯を覚えつつ、主を礼拝するのです。たとい、主を知らずに生涯を終えた家族があったとしても、その魂のことは神にお委ねして、神の前に祈るのです。

それは葬式においても同じことです。キリスト教においては、葬儀は神礼拝なのです。ある方が言われました。「キリスト教の葬式に初めて出ましたが、主日礼拝に似ていますね」と。まさに、そうでありまして、召された方が地上で歩まれたことの証として、その生涯の略歴などを辿りますが、主を礼拝することが軸なのです。ですから、この章で行われているヤコブの葬儀も「荘厳であった」とありますが、ヤコブをほめたたえるのではなく、神の恵みや壮大さをほたたえているところに、荘厳さを示されたのでしょうか。彼の生涯には失敗もありました。しかし、彼の悩み多き人生には共感を覚えます。

こうしたメッセージの裏付けがキリストの死と葬りと復活になかに現れています。つまり、キリストは十字架において、私たちの罪の身代わりとなって死に、信者によって備えられた横穴式の墓に葬られました。これは、第一にイエス・キリストも墓をないがしろにされなかったという側面があるでしょう。しかし、墓の中に安置された後、三日目の早朝、主イエス・キリストの亡骸はその墓にはありませんでした。よみがえられたからです。これは、主は復活してその墓から抜け出されたからです。復活の体をもって、弟子達や多くの人々の前に現れました。そして、ついには弟子達の見ている前で天に昇られたので

す。ここに、復活の命を与えられた者たちになが目指していくところは、お墓ではなく、天に御国であると確認できるのです。

私たちは、地上で、この肉体をもって生きます。そして、数々の恵みにあずかり、キリスト信仰によって永遠の命を与えられた者たちです。しかし、この肉体を持っている者も、やがては地上での命は終わります。しかし、誰も自分の葬儀に参加するものではありません。生きている間に、十字架と復活の主を仰ぎましょう。主の平安と喜び、希望をいただいて歩みたいのです。

地上の体葬りと墓についてはないがしろにはしません。しかし、私たちが目指すのは御国。最終的な希望の場所は御国である、ということをお今朝もう一度覚え、復活の主イエス・キリストを仰いでいきましょう。